

再確認傾向と精神的健康の関連

— 感情制御時の対人ネットワーク利用の観点から —

○安部主晃・中島健一郎

(広島大学大学院教育学研究科)

目的

再確認傾向とは、自分は愛されているのか、価値がある存在なのか、重要な他者に対して、しつこく確認する比較的安定した傾向である (Joiner, Alfano, & Metalsky, 1992)。再確認傾向は、抑うつと正の関連が一貫して認められており (Starr & Davila, 2008)、精神的健康を棄損する要因の一つとされている。

勝谷 (2006) は、再確認傾向の高い者が気分の落ち込み時に、重要他者への働きかけ行動 (e.g., 情動的サポート要請) を行う傾向にあり、対人ネットワークを十分に利用していないことを示唆している。しかし、この研究では、気分の落ち込み以外の感情が喚起されたときに、それを利用していないかどうかについては検討されていない。

この点を解決するために、本研究では Emotionships に着目する。Cheung, Gardner, & Anderson (2014) は、様々な感情の制御時に利用する他者のネットワーク構造を、Emotionships として概念化している。Emotionships には、対人的感情制御を行う感情領域の広さ、感情領域ごとに求める他者の平均人数、特定の感情の制御に特化した他者の割合である個別度、という指標から構成される。Cheung et al. (2014) は、感情領域の広さと個別度が、主観的幸福感と正の関連を持つことを示した。Emotionships は、様々な感情の制御を想定しており、対人ネットワークの量的な側面を含んだ概念である。そのため、再確認傾向の高い者が、感情制御を目的としてどのように他者と関わるのかを明らかにするためには、Emotionships を用いた検討が有用と考えられる。

以上より、本研究では再確認傾向の高い者が感情制御時に利用する対人ネットワーク構造が、精神的健康に及ぼす影響について検討する。再確認傾向が高いほど、Emotionships の各指標が低く、精神的健康が低いことが予想される。

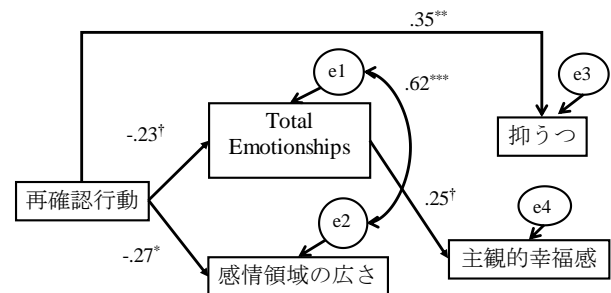
方法

参加者 私立大学の学生 56 名 (女性 29 名、平均年齢 20.1 歳) を対象に、質問紙調査を実施した。
測定指標 再確認傾向 (再確認願望と再確認行

動の 2 因子; 12 項目 7 件法)、抑うつ (20 項目 4 件法)、主観的幸福感 (4 項目 7 件法) を測定した。**Emotionships** Cheung et al. (2014) に則り、7 つの感情制御場面 (e.g., 不安を緩和する; 恥ずかしさを和らげる) のシナリオを提示した。そして、そのとき一緒にいたいと思う人物のイニシャルを、最大 4 名まで記入するよう求めた。全ての感情領域で挙げられた他者の人数を、a) Total Emotionships とした。また、1 人以上の人物が挙げられた感情領域数を、b) 感情領域の広さとした。そして、Total Emotionships を感情領域の広さで割った値を、c) 平均人数とした。さらに、複数の感情領域で重複しない人物の数を Total Emotionships で割った値を、d) 個別度とした。

結果と考察

予測の検討のために構造方程式モデリングを行った。結果を Figure 1 に示す。



注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
GFI=.956, AGFI=.867, CFI=.956, RMSEA=.082

Figure 1. 再確認傾向, Emotionships, 精神的健康の関連

その結果、再確認行動が高いほど、Total Emotionships が低い結果として主観的幸福感が低いことが示された。再確認傾向の高い者は、他者の負担になっている感覚が強いため (Hames, et al., 2015)、感情制御時に十分な対人ネットワークを利用できず、主観的幸福感が低下すると考えられる。また、Emotionships と抑うつとの関連は認められなかった。再確認傾向は重要他者からの拒絶を介して抑うつに影響を及ぼすことが示されており (Stewart & Harkness, 2015)、主観的幸福感への影響とは異なる過程が存在する可能性が考えられる。